

月に住む人

一幕二場

長谷川時雨

人物

嫦娥

翠（その夫）

隣人某

旅の少年

侍女七人

極めて古代なる風俗。庭園も自然に、廣々として華麗ならず。月の光りは夢の國を思はせ、家造りは上手より斜に三段の階ありて大理石の露臺がある。奥の方にけばくしからぬほどの古みのある錦の帳が引いてある。

舞臺空虚。

嫦娥　　ありがたうござります。もうお手をおとりなさつて下さいまし。

少年　　またお倒れなさるといけませぬから、もすこし此儘まゐりませう。

少年は嫦娥の體をささへながら来る。

嫦娥　　もうよいのでござります。離れてゐて下さりませ。

少年　　それでも今宵がはじめてではなし、お一人では危ないやうで案じられます。

嫦娥　　貴下は妾が病ひのために、あゝやつてゐたのだと思ひになりましたか。

少年　　お體が悪いのに違いないとぞんじます。丁度七日前の夜にもかうやつてお送りいたしました。その三日前の暁方あけかたにも……

嫦娥 さうもうせば、貴下は何處やらへお立ちになつてお出の筈ではござりませぬか。

少年 さあ——出立するつもりではございましたが、あてもない旅のことゆゑ。それに、すこしばかり氣になる事がありますので。——それは貴女の御病氣のこと
でござります。

嫦娥 ほほ、妾は病氣ではありませぬ。

少年 なんと仰しやつても、私は心配でなりませぬ。此前の時は、あの桂の樹へ寄り
かゝつて、凝となさつたまつて、二時も三時もおすごしなされました。

嫦娥 それを貴下は見てお出でなされましたか。

少年 (恥かしさうに) なんの心もなく、お隣の美しい夫人を見上げることが出来た
と思つて、ついお顔を眺めてをりますと、あなたのお目が段々に空虚うつろのよう
になりましたので、あとでは無禮なことに氣が付きましたが、ついあの時は御體
にさはつてしまひました。

嫦娥 あの前の時には。

少年 あの時こそ、ほんの偶然で、くさむら葎の露があんまり美しいので、いたづらに拂ひ
おとしましたら、草のかげに仰向いて寝てお出になつた、あなたのお顔へ、玉
のような雫をみんな轉ばしてしまひました。あの時こそ、あの時こそ、私は—
—。

嫦娥 ……

少年 私はどんな罪にあつてもよいと思ひました。私は貴女を仙女だと思ひました。
仙女でおありなされた方が、貴女のためには宜しかつたことでせう。それから
は、もしや御病氣が起りはしないかと心配しながら、心待ちにしてゐるような
心をもつやうになりました。私は今でも、どんな罪にあつてもよいと思つてを
ります。

嫦娥 それで今宵も、おめつけなされたのでしたか。

少年 (大膽に) 月のよい夜は、凝として枕についてゐることが出来なくなりました。

貴女が庭へお出になるのは、月のよい夜頃ばかりだと気がつくやうに、愚な心が伶俐さかしうなりました。旅へゆくのもやめにいたしました。私の旅は、何日また此處へ歸つてくるやら、そんな行先の知れた旅ではないのでござります。此處の土から、一たん足を踏出したらば、もう永久歸つてくることの出来ない運命があるような気がするのでございます。私はもう、自分の心の中に影やまぼろしを寫すだけでは物足りなくなつたのでございます。私は及ばぬことを思つて居ります。

嫦娥

妾も、及ばぬ望みを思ふてをります。

少年

どうぞもうすこし聞いて下さりませ。一昨日おととひあたりから私は戀しさが興こゝろじて、狂ひ死をするやうな心持ちになりました。それもさうでござりませう、もう七日から、お聲もきかなければ、お姿も見ることが出来ませんでしたもの。晝は一日閉ぢこもつて、やれ嬉しや夜になつたと思へば、月のない、曇つた空つづき、心が亂れないでゐられませぬ。狂ほしうならいではゐられませぬ。どうした事が一昨日から、明後夜は死ぬといふことが、どうしても拭い消せないやうに思はれてまゐりました。それで私は心が強くなりました。どうしても今日はお目にかからなければ、自分の命が危いし、ほんの卯の毛のさきほどでも、仙女のような貴いお方に、及ばぬことを思つてゐたことを知つて頂きたいと――。

嫦娥

今宵は晴れたので、久しぶりな光りに逢うて、懐しうてなりませぬ。

少年

平日いっしょならば、お側にかうやつて居りますのを、誰にか咎められはしまいかと怯へて、とても此處までは参られはいたしませぬか――。

嫦娥

さあ、もうお歸りなされませ。今宵は晴れたゆゑ、貴下のむすぼれた御心もはれたでござりませう。

少年

あれだけ申上げて、もう歸らなくてはいけませんか。では、――私の心ゆかしに稟うかつては悪いかも知れませぬが、貴女のお望みとかを聞かせて頂きたうござります。もう其上の願ひは、屹度いたしませぬ。

嫦娥 ひと 他人にいふたとて、誰も誠と思つては下さりませぬ。

少年 他人は知らず、私は貴女の仰しやることを、決して疑ひはいたしません。

嫦娥 (思ひ上りし姿にて天に指さす) 妾の還る國は、御空に澄む月の世界。妾は月

の國の女王に生れなければならなかつたのを、此様な身に墮ちて、人妻なぞになつてゐなくてはならないのが、口惜しくなりました。妾は當然生れてゐなくてはならない、月の懐が戀しくなりました。

少年 御病氣がまた起りましたか。おいたはしいとは思ひますが——私は今、自分の心を感じたり思つたりしてゐる心持ちを、どういふやうに申上げたらいいでせう。此儘、かうやつて、今宵中お身體からだをささへてゐることをおゆるし下さいましたなら、明日になつて私の魂は私に返らないものになつても怨みはいたしません。

嫦娥 (少年の手をかく拂つて) 疑はないと仰しやつた貴下は、疑はないかはりに、病のせいになさりますか。

少年 でも、貴女のお瞳が。

嫦娥 誠と信じて下さいまし。妾は仙女でござります。妾は仙女でござります。人間の戀は受けることはできません。

少年 さう仰しやるのは、思ひきらせるためなのでござりませう。

嫦娥 もう仰しやりますな。妾もやがて願ひがかなひ、あの國へ還るのも遠くはないやうに思はれます。貴下も明日は御出立なされませ。丁度此國へお出でなされた時のやうに、なんの蟠わたかまりもないお心をもつて——月のまへを通り過ぎる白雲のやうなお心で、妾のほとりに通り過ぎて下さりませ。

少年 それは私に死ねと仰しやるやうなものでござります。私とて、なんでのない旅をいたしませう。私が目に見えないものを探し歩いてみたといふのは、貴女といふ方を見出すためであつたといふことが、やつと今わかつてまゐりました。其貴女を捨て迷ひ出たら、今度は幾萬年、何處をどううろついて歩いたとて、

私の求めるものがあらう筈はないと思ひます。

嫦娥

月の光りは温かくはありませぬ。仙女に戀はありませぬ。妾が此世で好むものは舞踊ばかり、今宵もあんまり踊りすぎて、倒れてゐたのを貴下に助けられました。妾は自分で自分の踊るのを見るよりほかに、ついぞ他人に見せたことのないのを、優しい、いとらしい貴下の旅立のお饞けに、お目にかかせう。

少年

忝けなうござります。死の國へゆく旅立には、過分な饞別はなむけでござります。

嫦娥

(舞の姿整にて)月の光りを一ぱいに浴びて、今宵は出来るだけ華やかに舞ひませう。が、御覧なされませ、妾の手から、肩から、いいえ髪の毛から流れおちる色の冷たさ——どうして胸に赤い華が咲きませう。貴下は戀の芽のめぐむ、温かい處女の胸をたづねてお出なさらなければなりません。(舞ふ)さあ、もうお別れの時になりました。

嫦娥は舞ひながら帳の奥へ入つてしまふ。少年は後を追ひかけて、階段に足をかけながらたゆたつて、以前の場處にかへり、土に座して思ひにふけつてゐる。

隣家の主人忍びやかに来る。

隣人

おお、此處に御座られたのか。や、も、ゑらく探しましたわい。どうなされたのぢや、顔色もようないし、何やら思案にあまつたやうにも見える。さ、さ、御座りませ。夜露に長う濡れてゐると體をしまひますわ。それに此頃はこのころどうやらお加減もようないによつて、大切にしなければなりません見ず知らずの國で病わづらうたら、難儀なものでござりますわ。いや、私の性質は、いかに旅の客人ぢやからとて、病わづらうた人を、粗末に取りあつかふやうなものぢやないが、こなた様の心柄から、物淋しう思はしやるのが氣の毒に思はれるのでござる。さ、私が手をとつてあげます、そろ／＼と歸つて、心をやすめたがようござりませう。——ほう！ 此處は隣家の、しかも主人の居間の前のやうな——長年

隣りに住まうてゐる私さへ、今初めて来たところぢやに、こなた様どうしてお出たのぢや。

少年 （力なく、連れられて歩みながら）私は一人では來ませぬ。

隣人 さうでござりませうとも。だが誰がお連れ申したか？ や、も、此家の主人は噂の高い嫉妬の強い人でなあ。

少年 え。

隣人 美しい夫人を見られるのが嫌ぢやといふのでな、晝は一寸も外へ出させぬわい。

少年 それは誠のこととござるか。

隣人 噂といふものは、えて間違ひを傳へるものでござるが、これは正當なこと、決して餘分な作りごとではありませぬ。それが證據には、私は此様に頭が抜け上つてしまふ年まで、隣家にながらへてをりまするがな、ついぞ夫人の姿を見かけたこともありませぬ。美しいといふのも、大方見たこともないものの、當推量かと思つたほどとござります。

少年 それは違ひます、まったく美しいお人です。美しいといつては勿體ないやうなくらいです。此世の人とは思はれないほどなお方です。

隣人 さうでござりませう、さうでござりませう。それに違ひありません。いや、私もそれほどはなからうと一人極めをしてをりましたがな、ところが、嫉妬深いといふ此家の主人の口から、つい先頃のこと、女房が美しいので心配でならないといふ愚痴を聞きましたので、こりや本物だわいと存じました。

少年 （興奮して）どうしても、も一度逢はなければならぬ。私はどうしてもあの女から離れることは出來ない宿命になつてゐるのだ。

隣人 だが、あなた様はどうして夫人の美しいことを御承知になりました。

少年 今宵がはじめではありません。もう逢つてから三度になります。そして其度に、あのお方の病ひの介抱をさせて貰ひました。

隣人　へへえ？

少年　私は長い間、諸國を流浪して、あのお方をたづねてゐました。

隣人　ああ、それでよく分かりました。以前からのお知己しりあいでございましたか。もし、それならば御願ひがござります。なんと叶へて下さりませうかな。

少年　私にも願ひがあります。

隣人　私のは、あなた様のお手引で、何處の物蔭からでも苦しいござりませぬゆゑ、一目拜ませてお賞ひ申たうござりますが、どんなものでござりませう。

少年　それならば私の願ひとよく合ひます。私も一目逢ふて行きたいと、それで此所に今迄ゐました。

隣人　それにはよい事がござります。萬一主人に目つけられましたらばな、あなた様が旅のお客人ゆゑつい庭うちをうろついてゐられましたから、私がお迎ひに出ましたと、言抜けが出来ますでなあ。さあ、それではと——其處らへ忍びませう。

舞臺また暫くのうち空虚となる。

嫦娥輕らかなる衣服と着代へて、侍女をしたがへて出て来る。

侍女は七人とも同じ様なる衣服にて、同じ年頃の若き顔の美しくき女。

其一人は嫦娥のまどふ薄き衣を持つてゐる。

侍女一　今宵も露臺ぎよしんで御寢遊ぎよしんはしますか。

侍女二　御枕を持つて参りませうか。

侍女三　お床もなければ、お體におよろしくござりますまい。

嫦娥　いいえ此儘がよい。私にはどうしても寝られはしないのだから。

侍女四　殿様は、どうしてもあちらへお連れませと仰せられます。

侍女五　月の光りが、お眠りをさまたげるのだと仰せられました。

待女六 あの厚い帳のかげの、お寢間へお連れませと仰せられました。

待女七 そしてあの、私共がお二方のお仲を裂くのだとの御意でござります。

待女一 私共がお附添ひ申してをりますので、あなた様が殿様につれなく遊ばしますと、御意なされます。

嫦娥 殿様には、どのやうに申上げて、私の心持ちがお分りにならないのだから仕方がない。そして私の厭がることばかりお撰みになつて、私を慰めて下さらうとなさるから、つい厭はしいと思ふやうにもなる。このやうな折には投はつておいて下されて、遠くの方から眺めてお出遊せばよいものを、いら／＼なさるので、猶更私の心を遠くへやつておしまいなさる。——さうは思はないか。

待女一 さもあなた様に、思ふお方があるやうに仰せられまして、猥なやうに御意遊ばしますのが、くちをしうござります。

待女七 私共が番兵のやうに御守護をして、殿様を近づけぬことや、他のお方をお寢間へお呼びませす役目のやうに、口汚なう仰せられます。

嫦娥 さう思召すお心ゆゑ、妾の戀を人間界のこととよりお考へがつきかねるのであらう。

待女二 御安心遊ばしませ、夫人が焦れてお出遊ばしますのは、あの月の御國なのでござりますと、いかほど申上げてもお聞入れがござりませぬ。

嫦娥 お聞入れはあるまい。妾があるだけの言葉をならべ、人の口で云へるだけは云ひつくしてみても妾の思ふてゐることが酌取れぬと仰しやるもの、そなたが云ふたとてお聞入れは遊ばすまい。

待女六 此頃殿様は、不思議なお薬をお手にお入れ遊ばしました。

嫦娥 さういふことは妾も聞いてゐる。なんの薬なのか知つてゐやるか。

待女五 私には靈薬だと仰せられました。

待女三 西王母様といふ仙女から、おさづかりになつた、不死の薬だとのことでござります。

侍女四 あなた様にもそれを差上げ、殿様も召上つて、不老不死の御契を、おかため遊ばすのだといふことでござります。

侍女一 それは珠玉の小さい壺に入れてござります。私はあなた様のお爲に、その靈藥を盗まうといたしました。が、どうしても手に入れることがかなひません。で、悲しうござります。

侍女七 あの靈藥がお手に入れば、あなた様のお望みは、屹度かなふような心持ちがいたします。

侍女一 私共は、みんなさう信じてをります。

侍女七 あの靈藥を、お手に入れる御工夫をなされて下さりませ。

嫦娥 妾の影のようなお前達——妾の心の影のようなお前達。嬉しう思ひます。どうぞ妾の心に智恵と勇氣とをつけておくれ。

侍女二 さ、今宵も御氣分のよくなるやうに、私共は舞ひませう。

侍女三 お心がちらぬやうに、凝と月を御見詰め遊ばすやうになるまで舞ひませう。

侍女四 それでは今宵を、御機嫌ようおすごし遊ばしませ。

侍女五 今宵こそは、御空にお還りになれるやうに、お祈りいたします。

侍女等は嫦娥を中にして、はじめは小さな輪となり、次第に大きな舞の輪になつて、各自思ひ／＼のところへ消去る。

嫦娥圓鑑を取出して凝と見入る。

嫦娥階段に寄かゝり、薄き衣をまとひ横になる。

翠、帳のかげより忍びやかに傍に寄る。

翠 嫦娥、お前は今宵も此處で、私を離れて明かすのか。それもさうであらう、奥にゐては、何かと便りがわるからうからの。

嫦娥 何も仰しやつて下さりますな、どうぞ離れてゐて下さりませ。

翠 さうはなるまい。さうしたらはお前の勝手はよからうが、私の身分がさうはさせておかない。夫といふ名がさういふ我儘を許しておく事が出来ない。

嫦娥 貴夫は熱に病む人を御覧になつたことがござりますか。病むものは冷るのが悪いといはれても、熱いのは苦しいのでござります。御親切はうれしう思ひますが、妾は錦の床よりも、空を眺めて石の枕が好みなのでござります。

翠 それは聞きあきたほど古いお前の言種だ。一夜さ二夜さなら知らず、それも寝あきた秋の長夜のすさみなら、興もあらうと許しもしやうが、汝のは毎夜のようではないか、偶々奥に寝るときには一泣きあかしてゐる。そんな晩は屹度暗夜の時ばかりだ。私がそれを知らぬと思ふのか。月の夜には誰が忍んで来るのだ。

嫦娥 そのやうなことを聞くのは、もう幾とせになりませう。妾は聞きあきました。

翠 私は言ひあかぬ。汝といふものの心が知れなければ、幾年同じところに住んでゐたからとて、女夫といふ心を許しあつた仲とはいへない。私はそれが悲しいのだ。

嫦娥 妾は女夫といふものになつたのを悲しみます。妾のためにはたつた一つ、それが障礙になつてをります。

翠 さういふ事を云ふのも二人の仲に何か解けぬところがあるからなのぢや。人間の睦みに、女夫ほど縁の深いものはない。其二人の仲に解けぬ謎はない譯ではないか。汝にさういふ心をもたせるのも夫の私に半分の責はある。私はどのやうに手を盡しても、頑固な汝の心をといて見せる。

嫦娥 それは無益でござります。千年萬年経ても、貴夫にこの思ひやりは出ませぬ。悲しいことでも、妾の心は貴夫の御手には歸りませぬ。

翠 千年でも萬年でもよい。私は其爲に出来るだけのことを盡して見やう。汝は知るまいが、私は不老不死の靈藥を手に入れることが出来た。汝が今思ふてゐる男に死なれて、また新らしいものが出来やうとも、いつまでも私は待つてゐる。

私は私の手に汝を取かへさないではおかない決心をした。

嫦娥

其様な深い執着が付きまとふゆゑ、妾の望みはとげられぬのでござります。(泣く) 妾はもう此儘やがて遠くはないうちに墓石となりませう。

翠

何故そのやうな聞きわけないことをいふ。汝が愛しうてならぬゆゑかうも思ふのではないか。汝を死なしてよいものか。此世にありとある快樂は二人で受けるのぢや。我儘をいふまい。此様な寢床にゐては、誰しも悪い熱になる。それとも、強て此處に居たいといふのなら、今宵から私も此處を寢床にする。妻の傍に夫のゐるを拒むわけはあるまい。

嫦娥

いえ、いえ、退いてゐて下さりませ、退いてゐて下さりませ。どうしても退いて下さりませぬならば、妾は裏の沼へいつて、水底の冷たい床に眠りませう。沼の底ならば誰も妾の魂を揺り起すものもなく、貴夫も御心安うなませう。妾も望みを諦めてしまへば、一番よい寢床だと思はれます。岸の桂の木の梢から、月が夜もすがら水底をさし覗いて、あはれな女を勞つてくれませう。

翠

よいほどにせぬか。汝をそのやうな身にしやうとて私は苦しみはせぬ。汝がなくてなんで不死の靈藥が尊からう。それでは私は退いてゐる。あの帳のかげまで退いてゐやう。(行きかけて、立歸りながら) 妻よ、私が妻よ。——嫦娥、私を見せておくのを忘れてゐた。これが靈藥の入れてある壺なのぢや。私は此壺を、汝の寢床にあててある、珊瑚の枕の上においておく。いつでもほしようなつたら取りに来るがよい。が、ようおぼえておくがよい。密夫などはやがて厭るものぢや、靈藥なぞくれて悔まぬやうにしたがよい。どうぢや、私は汝を此やうにまで寛大にしておく。汝もよい時分に我慢を捨て、來た方がよいやうだな。翠は小さき壺を見せて、見返りがちに去る。

嫦娥

——靈藥の功德で思ふ國へ行かれるなら——此様に思ひみだれたことは、つい

ぞないが——あの寢床の、珊瑚の枕の上には靈藥の壺がおいてある。取りにゆくのは盗みにゆくのではない。だが傍には障礙がある——

第七の侍女、いづくともなく現はれ出て、嫦娥の裾の方に居る。

嫦娥

——高望^{たかのぞ}みはやめよう。この冷たい石の床の上に、夜の間に白い雲が降りてきて、妾の魂を夢のまま乗せていつてくれたなら——妾はそれで満足しよう。明日は冷たい形體ばかりが残つてゐたなら、つれなく引止めた人も、心安うなつて満足するであらう。

第一の侍女、帳を奥よりかかげて上半身を出す。

侍女一 お夢のうちにお迎ひは近よつてまゐりました。お出かけの用意をなされたがお宜しうござります。

第一の侍女一度姿を帳の奥に消して、すぐに靈藥の壺を持つて出てくる。

第七の侍女は、嫦娥の上衣を脱がせる。嫦娥は意識なく夢の中のやうに立上る。

侍女一 貴女様のお枕の上にあつたものを、あなた様がお取りになるのは、盗みでもなんでもござりませぬ、御安心遊ばしておよろしいかとぞんじます。

侍女七 さ、御用意は調ひました。今宵^{こよひ}の今夜^{こんや}を、兼々どのやうに待久しく思召しましたこととでござりませう。私共はお察し申上げてをります。

侍女一 何事にも御心をお残し遊ばしますな。潔よい、すがくしいお心地でなくては、これから月に曇りが出来ませうかとぞんじられます。

侍女七 殿様のお目がさめぬやうに、あなた様のお側へお近より遊ばすことの出来ませ

ぬやうに、私共は舞の輪をはじめますでござりませう。其のうちに早うお姿をおかくし遊ばしませ。

嫦娥は靈藥の壺をとつて行きかける。他の五人の侍女も、いづくともなく影を現はして大きく舞の輪をつくる。嫦娥の去ると同時に舞臺は薄暗くなつて、舞の輪も小さくなる。

暗轉。

一面に薄のまじりたる芦洲、下手より奥へ深く沼になつてゐる。

月は折々明るく暗くなる。

嫦娥宙を行くやうに沼の上を奥の方へとゆきかける。白き雲煙のやうに細き腰のあたりに流れかかる。

少年 待つて下さりませ、待つて下さりませ。

嫦娥は心もち停んでゐる。

少年 私は悪いと知りながら、貴女方お二人のおはなしを聞きました。貴女のお心は

すこし知ることが出来ました。どうしてもあなたが、此土の上に住んでゐることがお厭ならば、私は決して無理なお願いはいたしません。どうぞ其代りには、私の影も貴女のお出のところへお連れになつて下さいませ。——ああ、お待ちなさつてゐて下さりますか、忝けなうござります。私が貴女に差上げるものとしては何にもありはいたしません。此命をと申上げたうござりますが、貴女には私の命なぞが、何の足しにもならないといふことは、愚な私にもよく分つてをります。私はもう貴女のお手に縋らうともいたしますまい。貴女のお體に手を觸れようなぞと、たいそれた事も願ひはいたしません。どうか私といふもの

の信實を哀れんで下さりませ。それでも私の望みは足りるのでござります。此沼に私といふ貴女に許された、しがたない旅のものが、満足して永住してゐるといふことだけ、どうぞお忘れなさらずにゐて下さいまし。私は丁度先刻貴女のお口から、貴女が仰しやつたやうに、此沼の水底を永久に眠の床にいたしませう。それがどんなに満足だかといふことは、あの桂の木の梢から御覧になつて下さいまし。私の寝顔は、不しじゆうほほ斷微笑ゑんでゐるに違ひございませぬ。——お止めまをしましたのは、これだけを聞いて頂きたいと思つたからでございます。も一度、はつきりとお顔が拜みたいやうな氣もいたしますが——折悪しく曇りました。もしや、貴方は泣いて下さつてるのではございませぬか？ さうならばそれはお心得違ひだと思ひます。どうか私の爲にも、貴女の爲にも、御心を曇らさずにお出なさつて下さいまし。月の面が曇りましては、水沼から見上げるのにどんなに淋しいか知れはいたしません。長いお別れのやうでゐて、却て今迄よりもお親しくすることの出来るのを、私は嬉しいと存じて居ります。人の世の掟なんぞといふものは、もう私には今日からなくなるのでございますもの。そして毎晩お姿を仰ぐことが出来るのでございますもの、楽しくなくつてどういたしまして。

月影暗くなると、嫦娥は顔を被ひながら、さめくとして、やがてたゆたひがちに沼の奥の方へと去る。月影はまた以前のやうに明るくなる。少年は嫦娥の行衛を見定めるやうに眺めてゐる。

少年

私は嫦娥さまが、思ひにふけてお出なさる時を見出しては、あの方の尊い時間の邪魔をしてゐた。それだのにあの方は少しも私を憎んではいらつしやらない。私はどうしても、此心地を失つてはならない。戀しいの、お側へゆきたいのと、いふ考をすこしでも交へてはならない。嫦娥さまが空から見下して下さい

る時に、私は地の底から見上げてゐやう。こんなことを思つては悪いかも知れないが、私は唯一人、土に生てゐたものゝ中で、嫦娥さまが許して下さつた誇りをもつてゐる身なのだ。

少年は獨言きながら、沼の深みへとゆき姿を没してしまふ。月暗くなる。

隣人先にたつて翠が来る。

隣人 お庭中にはをさまよふてをりましたのは、全く私めの罪でござります。そのかはりには、貴君様の御心配の種になつた和郎わろの、在家ありがをお知らせをしますお約束は、決して拒みはいたしませぬ。

翠 妻が出奔した相手の男は、こなたが聞かせて下さつた男にしては、ちと少年すぎるかと思はれるが、間違ひではないか。

隣人 仰しやりますな、夜な夜な逢ふてゐたといふことを、私はちゃんと心得てをります。それに、夫人には御病氣があるとか申しましては、お手をとつたりお抱へまをして、御介抱をいたしたやうにも聞きました。

翠 いや、嫦娥には病氣はすこしもない筈だ。私に逢ふのが嫌な時だけ、病氣だといふ我儘があつた。

隣人 で、ござりませう。つまり御病氣と仰しやつて、介抱をおさせになつたものと見えます。や、たしかに此邊へ来たやうに、後姿が見えましたが、此處はもう古沼でござります。これから先は人の歩く道がござりませぬ。

翠 嘘りを云ふて、私を此處まで連れて来た暇に、二人を遠く逃がさうといふ手筈であつたな。

隣人 めつそうもないこと。考へても御覧なされませ。旅人を宿らせるが渡世とはませ、あの少年は何處から来て何處へ行くのやら、氏うぢも知らぬものでござります。それも黄金でも多く貯へてもゐたことか、あまり財袋の重い方ではござ

りませぬ。それを年頃のご知己に代へてよいものでござりませう。夫人ぢやとて、黄金はお持ちだしなさりはしますまい。

翠 それもさうぢや。嫦娥が盗んでいったのは、靈藥ばかりだ。

隣人 それ御覧じませ。だが、私はたしかに此道へ現のようになつてゆく男の姿を見かけました。あれほどに深く思ふてゐたのゆゑ、其一足さきには夫人のお姿が、てつきりある筈でござります。

翠 さういへばさうも思はれる——なんといたされた。

隣人 不思議なことがござります。あの男はどうしたものか、身うちから譬やうのな
い好い薫りを匂はせてをりました。それがどうやら、沼の中から薫つてくるやうでござりますわい。

翠 沼の中からはあるまい。我々が來たのを知つて、其處らに隠れてゐるのであらう。ちかま近間の蘆のかげを探したら二人とも居やう。

隣人 なるほど左様なことでござりませう。——や。

翠 目附け出されたか。

隣人 いや、かいくれ姿は見えませぬが、水ぎはに此様に光りのある、白露の精のような、月の涙のような珠が一顆落ちてをりました。

翠はその玉を受取つて透かして見る。

隣人 何か不思議は見えませぬか。

翠 何も不思議は見えない。ただ、光る月の中に、暗い影が出來てゐる。

隣人 どちら。私にお見せなされて下さいまし。やれやれ。——あ、やあ、不思議が見えぬだんではござりませぬぞ。あれあれ、月の中に七人の乙女が舞ふてをりますわい。そして眞中の桂の木の下にこなた様の夫人が座つて面白さうにそれを眺めてお出でなされますわ。

翠 何をいはれるのだ。そのやうなことはない。私にも一度見せたがよいわ。

隣人 さあさ御覧ごらんじませ。あなたの夫人と云はうより、月の神様といふほうが似合うてをりまする。

翠 私にはなんにも見えない。矢つ張りもとの通り、月に曇つた影が見へるばかりぢや。

隣人 どれぐ。いいや其様なことはござりませぬわい。舞ふてをります、舞ふてをります。や、夫人が立つて桂の木の梢へお登りなされた。——や、沼の底に、あの少年の面影が見えた。

月暗く闇夜のやうになる。

隣人 あれ、をしいところで月が曇つてしまった。私は明けるまで此處を離れますまい。

翠 (立去りがてらにつぶやく。) 不死の靈藥を盗んだ女だ、沼へはいつて死ぬやうな馬鹿なまねはしまい。道をかへて探したら追附け歸つてくるだらう。

——幕—— 一九一四・七・二三

底本 時雨脚本集 第一卷

長谷川時雨 著

出版社 女人芸術者

出版年月日 昭和4